

老年期における心理社会的課題の特質： Erikson による精神分析的個体発達分化¹⁾の図式 第Ⅷ段階の再検討

深瀬 裕子

(広島大学大学院教育学研究科)

岡本 祐子

(広島大学大学院教育学研究科)

本研究は、Erikson (1950/1977・1980) の精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic scheme において空欄となっている老年期における8つの心理社会的課題を示し、Erikson, Erikson, & Kivnick (1986/1990) との比較から、日本における心理社会的課題の特質を検討することを目的とした。高齢者20名を対象に Erikson et al. と同様の手続きによる半構造化面接を行った。その結果、8つの心理社会的課題を説明する肯定的要素と否定的要素、および課題に取り組むための努力である中立的要素がそれぞれ抽出された。これらより、第Ⅷ段階における8つの心理社会的課題を具体的に示した。また、各課題に取り組む際に、戦争体験、家制度、社会の中での高齢者の地位という日本独自の文化が影響していることが示唆された。以上の知見は社会参加に積極的な人々における心理社会的課題の取り組み方を示すものであり、特に高齢者の心理社会的課題を理解する上で重要であると考えられた。

【キー・ワード】 老年期, 心理社会的課題, 精神分析的個体発達分化の図式, E.H. Erikson,
統合対絶望

問題と目的

Erikson (1950/1977・1980) は、人生を8つの発達段階にわけ、それぞれの段階に顕在化する心理社会的課題を示した。老年期の心理社会的課題は自我の統合対絶望である。統合とは過去、現在、死を含めた自分の人生を再吟味し納得できるように折り合いをつけることである。また、絶望とは、過去、現在、死および自分の人生を受け入れられないことである。

このように心理社会的課題は、統合などの肯定的要素²⁾と、絶望などの否定的要素²⁾のバランスによって成り立っている。肯定的要素が否定的要素よりも優位となった状態が適応的な発達であり、否定的要素に傾けば病理的な心的状態に、肯定的要素と否定的要素が同程度の力を有している状態は病的であると考えられる(鏑, 1986)。また、Erikson (1950/1977・1980) はそれぞれの心理社会的課題が生涯にわたって続くことを強調している。つまり、高齢者の発達を説明するには、8つの心理社会的課題の老年期における取り組み方を示す必要があると考えられる。

Erikson, Erikson, & Kivnick (1986/1990) は、高齢者を対象に面接調査を行い、8つの心理社会的課題に関する様々な努力がされていることを示した。Peck (1955) は理論的考察によって、老年期に引退の危機、身体的健康の危機、死の危機の3つの心理社会的課題と危機を仮定した。その後、老年期の心理社会的課題に関する研究は、統合の構成要素や課題達成度を測定する尺度の作成、それらと心理的健康との関連が検討されている(Rosenthal, Gurney, & Moore, 1981; 岡本・山本, 1985; Whitbourne, Zuschlag, Elliot, & Waterman, 1992; 中西・佐方, 2001; Torges, Stewart, & Duncan, 2008)。また、近年では中年期に顕在化する課題である世代性と統合の関連を示唆する報告もある(McAdams, Aubin, & Logan, 1993; James & Zarrett, 2006)。これらの研究のうち、高齢者を対象として8つの課題全てを検討した研究は少ない(Viney & Tych, 1985; 岡本, 1997)。Viney & Tych は、8つの心理社会的課題のバランスを捉えるため、面接によって得られた語りを評定し、8つの課題全てについてパーセントイルで示すCASPM (Content Analysis Scales of Psychosocial Maturity) を作成している。我が国では岡本(1997)が、高齢者を対象にアイデンティティ・ステータスと8つの心理社会的課題への取り組み方の関連を検討し、「老年期のアイデンティティ統合のヴィジョン」を示した。

さて、心理社会的課題は時代や文化の影響を受けることが想定された概念であり、Erikson et al. (1986/1990)

1) 「漸成発達」とも訳されている。

2) 原語は Syntonic と Dystonic である。朝長・朝長(1990)はこれらを「同調性」「非同調性」と訳したが、鏑(1986)は、心理力動的観点から「プラスの心的な力」と「マイナスな心的な力」と表している。これを踏まえ、本稿ではより端的に「肯定的要素」「否定的要素」と記すこととした。

Table 1 調査対象者のプロフィール

対象者 No.	性	年齢	同居家族 ^{a)}	職歴 ^{b)}	現職
A	女	86	独居	専業主婦	無職
B	女	82	夫 (息子家族)	専業主婦	無職
C	男	81	妻	管理職 - 管理職	無職
D	男	80	妻	金融業 (定年退職) - 管理職	無職
E	女	77	娘	農業, 事務職 (パート)	無職
F	男	77	妻	福祉職員 - 教員	嘱託
G	男	77	妻 (娘家族)	製造業 (定年退職) - 管理職	無職
H	女	76	夫 (息子家族)	製造業 - 調理職	無職
I	女	75	独居	農業, 事務職 (パート)	農業
J	男	75	妻	技術職 (定年退職) - 技術職 (嘱託)	無職
K	男	74	妻	保安業 (定年退職) - 企業	無職
L	女	73	娘	看護師 - 教員 (定年退職)	無職
M	男	73	妻	教員, 自営業	自営業
N	男	71	妻 (娘家族)	製造業 - 営業職 - 運転手 (定年退職) - 嘱託	無職
O	女	70	夫, 義母	専業主婦	無職
P	男	69	妻	保安業 - 研究職 (定年退職) - サービス業 (嘱託)	嘱託
Q	女	68	夫	事務職 (パート)	無職
R	女	68	夫	事務職 (パート)	無職
S	男	66	妻	販売職 (定年退職)	無職
T	男	65	妻, 息子	管理職 - 教員	嘱託

注. ^{a)} カッコ内は近隣に住んでいる家族を示す。

^{b)} カッコ内は雇用形態あるいはその職を定年退職したことを示す。またハイフンは転職あるいは退職により職が変わったことを示し、カンマは副職を示す。

では、社会情勢の影響や個人の人生背景からの考察が行われている。また、これまでの研究において、人種の違いや欧米と日本の文化によって心理社会的課題の取り組む順番や、その取り組み方が異なることが指摘されている (無藤, 1979; Ochse & Plug, 1986)。

これらの知見を踏まえると、老年期の心理社会的課題の特徴として次の2つが挙げられる。第1に、老年期においても基本的信頼感 対 基本的不信感から統合 対 絶望までの8つの心理社会的課題があり、それぞれの課題における肯定的要素と否定的要素のバランスによって発達が説明されること、第2に、心理社会的課題には文化や時代が強く影響するため、現在の日本の高齢者を対象とした研究が求められることである。しかし、既述したように老年期における8つの心理社会的課題を検討した研究はごくわずかである (Viney & Tych, 1985; 岡本, 1997)。また、これまでの研究では心理社会的課題のうちの肯定的側面のみが取り上げられてきたため、肯定的要素と否定的要素のバランスを取るための努力は具体的に示されていない。さらに、現在の日本の高齢者を対象とし、その時代や文化を踏まえた実証的研究は行われて

いない。

本研究の目的

以上より本研究は Erikson et al. (1986/1990) と同様の手続きによる調査を行い、以下の2点を検討することを目的とした。1) 老年期における8つの心理社会的課題の特質を、主に肯定的要素と否定的要素のバランスの観点から捉え、2) Erikson et al. (1986/1990) との比較から、日本における心理社会的課題の特徴について考察する。さらにこれらを踏まえ、日本の高齢者における8つの心理社会的課題を検討する。

方 法

調査対象者

高齢者大学および第一著者の知人を通じ、65-86歳の在宅で生活を営む高齢者20名 (男性11名, 女性9名。平均年齢74.15歳) を調査対象者とした (Table 1)。

手続き

個別の半構造化面接を実施した。調査時間は120分-300分で、1-5回に分けて実施した。面接は対象者が指定する場所 (大学の調査室, 対象者の自宅, 喫茶店,

公共施設の会議室)で実施した。調査開始前に面接承諾書に署名を求め、録音や結果の公表についての同意を得た上で、内容をすべて録音した。まず年齢、生年月日、同居・別居家族と生活歴について聴取した(Erikson et al., 1986/1990の面接1にあたる)。その後、「どう感じているのかについて、ご自由にお答えください」と教示し、適宜 Erikson et al. から抜き出した8つの心理社会的課題に関する質問をした(Erikson et al.の面接2にあたる)。ただし、Erikson et al. は質問内容を明記していないため、質問内容が記述してある箇所や、報告者の語りから質問を推測し、記述してある内容を最大限反映させて質問項目を抽出した。心理社会的課題に関する質問項目はAppendix 1として添付した。なお、本調査は広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会によって承認された。

分析方法

分析は以下の手順で行った。①逐語記録から、現在について、あるいは現在と比べた過去について、心理的意味を含む語りを文章単位(1-5文程度)で抜き出した(語りの総数267個)。②Erikson et al.(1986/1990)、鏞(1986)を参考に各段階の特徴を記述した評定マニュアルを作成し(Appendix 2)、このマニュアルに従って①で抜き出した語りをEriksonの8つの段階に分類した。③岡本・山本(1985)を参考に、各段階に分類された語りを課題によく取り組んでいる肯定的要素、課題に取り組んでいない、あるいは課題に否定的な取り組みをしている否定的要素、および、いずれにも分類されないが心理的意味を含んでいたり、肯定的要素と否定的要素の両方の意味を含む中立的要素に分類した。④各要素の中で同様の意味内容と考えられる語りをグルーピングし、〈カテゴリ〉とした。最終的に各段階に5-10カテゴリ、合計57カテゴリが生成された。以上、語りの分類に関する分析は、臨床心理学を専攻する大学院生3名(うち1名は第一著者)で行った。

信頼性を検討するため、評定マニュアルを基に、臨床心理学を専攻する大学院生1名が評定を行った結果、段階の一致率は83.15%、〈カテゴリ〉の一致率は85.59%であった。なお分類が一致しない場合は、分析者3名と評定者1名で協議の上、分類を決定した。

結果と考察

分析の結果、老年期における8つの心理社会的課題を説明する要素が示された(Table 2)。まずこれらの要素の定義について検討し、次に段階ごとに特徴を述べ、日米の比較を行った上で、日本の高齢者の8つの心理社会的課題を示す。

各要素の定義

すべての段階において肯定的要素、否定的要素および

中立的要素が示された。肯定的要素は課題によく取り組み、肯定的な発達に向かっていることを示し、否定的要素は課題に取り組むことができずにいる様態を示している。肯定的要素と否定的要素はそれぞれ精神分析的個体発達分化の図式における第Ⅷ段階の対概念である。では肯定的要素と否定的要素の両方の意味を含む中立的要素はどのような様態なのであろうか。Erikson et al.(1986/1990)は、本研究で得られた中立的要素と同様の語りを「自分を信頼できる全体としてとらえられる生涯続いた感覚と、それに相対して荒涼とした分裂としてとらえる感覚との間のバランスを保つために、以前の課題をうまくまとめようとして、各個人はどのように奮闘しているのか」(p.58)であるとしている。これを踏まえると、本研究で示された中立的要素はErikson et al.(1986/1990)の示した各心理社会的課題のバランスを得るための奮闘であり、肯定的要素と否定的要素のバランスをとるための努力であると推察される。以下では、この仮説を踏まえTable 2にまとめた結果について論ずる。

第Ⅷ段階の特質

第Ⅷ段階はこれまでの人生と、自分の死への意味づけという2つのテーマから構成されていた。Erikson et al.(1986/1990)は第Ⅷ段階の特徴として過去、現在、未来の統合を示している。本研究ではこのうち、過去と現在の統合がこれまでの人生への意味づけ、未来の統合が自分の死への意味づけとして分類された。また、肯定的要素を構成するカテゴリである〈人生に納得〉に後悔の気持ちが含まれていることが特徴であった。先行研究では、老年期の統合は「今までの私の人生は大変意義深い価値あるものだった」(岡本, 1997)や、「私のこれまでの人生はかけがえのないものだと思う」(中西・佐方, 2001)など、否定的側面が含まれない項目による測定が主であった。しかしそもそも統合とは、過去を評価し、葛藤を解決し、過去を統合する試みである(山口, 2000)。すなわち、統合とは後悔のある人生をどのように捉えるかで示されるものであり、本研究のように後悔の気持ちが含まれていることは、むしろ妥当であると考えられる。

第Ⅷ段階の日米比較 Erikson et al.(1986/1990)の「人生を引き受ける」がほぼすべての対象者に認められた。回想研究では、語り直したり想起する度に、過去が肯定的に捉え直されることが示されている(Butler, 1963)。本研究とErikson et al.の示した第Ⅷ段階の課題への取り組みの様態がほぼ一致したことも、これによって説明でき、老年期における、時代や文化に寄らない特質であると考えられる。

第Ⅷ段階の心理社会的課題 否定的要素に死を恐れる様態ではなく、〈死を否認〉が現れたこと、過去・現在・未来の人生に絶望するというより、人生の後悔に固執す

Table 2 老年期の心理社会的課題に関するカテゴリおよび語りの例

段階	要素 ^{a)}	〈カテゴリ〉 人数；対象者 No.	カテゴリの説明	語りの例 (対象者 No.)
第Ⅷ段階	Pos.	〈人生に納得〉 N=7；A, D, E, J, M, O, P	人生に、後悔を含めて納得している。	「人間って“これで満足”ってことはないと思うけど、まあまあこの人生でよかったんじゃないかと思う。」(A)
		〈死を考える〉 N=4；B, J, L, Q	死に方を具体的に考えている。	「死ぬことはいつも考えるよ。目に見えてるから、死に方を考えるの(笑)なるべくコロっと死にたいっていうのと、寝た切りになりたくないっていうのがすごくある。」(L)
	Neu.	〈死を意識〉 N=7；A, B, H, I, P, Q, R	死ぬまでの間、楽しく穏やかに過ごしたいと思っている。	「あと10年。あと10年楽しく過ごせればいい。子どももそれなりに一人前になってるし、後は自分たちが健康で、したいことをして、楽しければいいかなって。」(P)
		〈過去を切り離す〉 N=1；E	不幸な過去を、現在と切り離す。	「今は幸せな生活だし。人間早く切り替えないと、いつまでも昔のことを思ってもしょうがない。」(E)
	Neg.	〈死を否認〉 N=4；A, C, E, M	自分の死を考えない。	「将来はクエスチョンです。あまり考えないようにしています。」(A)
		〈人生に後悔〉 N=4；E, F, H, L	自分の力ではどうしてもできなかった人生の後悔があり、それに固執している。	これまでの人生「あんまり満足していない。経済的な理由があって、自分のしたい時にしたいことができなかったって言うのがありますね。もし今の世の中に生まれてたら色んなことしたかっただろうなって。」(L)
第Ⅶ段階	Pos.	〈一歩引いてかかわる〉 N=9；A, C, D, E, J, K, M, N, P	子どもや孫に、距離を置いてかかわろうとする。特に孫の世話は「親の役目」と考えている。それでも、子・孫との関係は持ち続けている。	「孫の教育方針にも口出ししません。育てていく子は親の責任ですから。口出ししてはいけないと。でもいい事だけは褒めてやります。」(C)
		〈役割逆転〉 N=5；E, G, I, L, M	子どもに世話されることを引き受ける。	子どもたちはいつも私に文句を言う。私。割と考えないでぱっと行動しちゃうから、それを心配してるの。私はあまり反発しない。(L)
		〈育児に満足〉 N=6；C, D, I, L, M, P, Q	自分の育児体験に満足している。あるいは、自分が世話したものの成長に満足している。	「娘は『お母さん大変だったね。百姓しながら3人も大学に行かせて、よくやったわって思うよ』って言います。」(L)
	Neu.	〈次世代の幸せ〉 N=3；E, K, O	自分より、子・孫など次世代の幸せを願う。	将来は「子どもたちの幸せを願いますね。」(O)
		〈世話役割の維持〉 N=7；D, E, N, O, P, S, T	子・孫を世話する役割を維持している。	「孫に、悪いこととか、しちゃいけないことはちらちらっと言ってますね。その方が効果があるみたいでね。細かく言うよりは、親の言うことは聞かなくても、結構お祖父ちゃんお祖母ちゃんの言うことは聞いてくれるみたいです。」(P)
		〈世話を遠慮〉 N=5；H, J, L, O, P	子どもに世話されることを、子どものために遠慮する。	「やっぱり子どもに面倒はかけられないっていうのがある。寝たきりになって介護はやっぱり大変だからね。」(L)
		〈継承を再考〉 N=3；B, G, R	継承できないことを、再考したり捉えなおしたりして、納得しようとしている。	「子どもがいらないから、跡継ぎのことね。やっぱりいらないよりいたほうがいいよねって。」(R)
	Neg.	〈次世代との隔たり〉 N=5；A, H, J, N, O	自分の経験や思いが、他の世代に分かれないだろうという思い。	孫の大学進学について「今の人は誰でも努力すれば大学に行けるって言う気を持つてると思うけど、私たちの時代からすれば、そうとう勉強が出来ないと奨学金なんてもらえないって言う時代でしたからね。」(J)
		〈育児に後悔〉 N=4；E, H, O, T	育児に後悔が残っている。	「子育ての時に、ちょっとわがままに育ててしまったかなとか、もっと強く育てておけばよかったなって思うようなところもありますし。」(E)
		〈役割逆転を拒否〉 N=5；B, J, K, L, S	子どもに世話されることを拒否・否認する。	将来、介護されることについて「あまり世話にならなくていいよ。出来るだけ世話にならないような生活をしていきたい。親は親、子どもは子どもって思ってるから、親がだめになったから子どもに面倒をみてもらうっていう考えはあまりない。」(S)
第Ⅵ段階	Pos.	〈相互補助〉 N=4；B, E, G, S	配偶者や友人と助け合ってきたという、相互補助の感覚。	夫とは「お互いにちょうどいい感じ。昔からそう言う感じ。2人を足してちょうどいい。」(B)
		〈心を許せる〉 N=4；B, E, K, Q	この相手にならすべてをさらけ出せるという感覚。	「色んなことを話できるから、友達っていうのはいいねってつくづく思う。友達は何でも話ができ、信頼してるし。親戚にできないことも話せる。」(E)

第VI段階	Pos.	〈支えられ〉 N=7; A, C, L, M, N, P, T	相手が自分を一番理解してくれ、支えられているという感覚。	「自分の一番の支えになってるのは、家族、特に妹との関係かしらね。同じ時代に同じ家で育ってるから。」(L)
		〈尊敬〉 N=4; B, F, R, O	相手を尊敬している。	「妻がいつの間にかわしを鞭うちよるんよ。『今のうちにしたいことはせにゃ』って、『そりゃそうよね』って。あれだけは関心するんよね。それが愛情かなって思うんよね。」(F)
	Neu.	〈一定の距離を置く〉 N=3; H, I, R	関係を続けるために、一定の距離を置こうとする。	友達とは「心からの付き合いということはないよね。親しき仲にも礼儀ありってことでね。いくら友達でも、ある程度の距離を置かないといけないうのよね。」(I)
		〈新しい関係を築く〉 N=5; E, L, N, O, R	現在も関係を広げようとする。	「歓迎会とか送別会は、全然知らない先生のもも行ったりする。私はヒマだからね。みんな遠慮ないですし、私も人見知りしないからばっと知り合いになるし。」(L)
		〈同じレベル〉 N=4; C, H, R, T	同じレベルあるいは同じ価値観の相手と関係を持ちたいという感覚。	仲のいい人は「話が合うのよね、私の年齢も主人の年齢も、子どもの年齢も近いからね。あまりかけ離れてると、話がちょっと違うでしょ。」(H)
		〈変化に折り合う〉 N=8; B, D, E, F, G, H, J, O	亡くなったり、衰退したり、変化した相手との関係を受け入れる。	「友人が亡くなっても、不思議にね、あんまり悲しいとかいうことはなくて、『ああそうか、ついに亡くなったか』って言うぐらいのこと。『そうよね、みんな一病息災よね、無病息災いうのはないよね』って。」(F)
Neg.	〈独立独歩〉 N=5; E, G, J, L, Q	誰かに頼りたくないという感覚。	「お互いに、同じ趣味で分からないことがあったら相談をするような仲間ですね。自分の悩みを聞いたり話したりはしないですね。話しても分からないんだからという。だから割と独立独歩ですね。」(J)	
	〈寂しさを感じる〉 N=7; B, F, J, K, L, O, S	関係がなくなったことに、寂しさを感じている。	「友達の葬式には何度か行ったね。最近になったら、同じような年代の友達が亡くなると、侘しさを感じるよね。」(K)	
第V段階	Pos.	〈自己感覚の維持〉 N=5; E, N, O, P, T	自分らしさを、ずっと持ち続けているという感覚。	「小さい頃から内気だとか陰気だとか。目は自分の方に向いてましたから。今でもそうです、内向的なところはありますから。外に向かって発信するよりは、自分で考えるとかいう方があるから。」(T)
	Neu.	〈高齢者のモデル〉 N=3; B, M, P	高齢者のモデル・生きるモデルを持っている。	「杖ついて、腰の曲がったお婆さんとか、足を引きずったお爺さんなんかも(旅行に)行ってるのよ。あんな方がまだいると思ったら、私も頑張らないと思うわ。」(B)
		〈生きる目的〉 N=3; I, N, T	これから先の生きる目的を持っている。	料理を勉強しているのは「将来必要になるかもしれないからっていうのはありますね。」(N)
		〈自分らしさの確認〉 N=2; H, T	自分らしさの確認を、親から受け継いだもので確認する。	「アイデアを形にしていくということが出来る力を持っているということが私の私らしいところ。この原点、絵を描くことは私の父親が好きだったらいい。それから愛情に包んで肯定感を与えるというのは母親が果たしてくれたこと。」(T)
		〈取り戻す〉 N=7; G, I, L, M, O, P, R	過去にやり残したことを、今、している。	「やっぱり小さい時にできなかったピアノは今していますね。」(L)
	〈後悔を再考〉 N=3; C, I, P	やり残したこと、後悔を再考して、納得しようとしている。	「貧乏であるがゆえに、どれだけ情けない思いをしたことがあるか。でも、だから今駄目だっていう気持ちは一切持ってません。その時点ではものすごく悔しい思いをさせられましたけど、決して負けるかという気持ちもありましたしね。」(C)	
Neg.	〈過去に納得できず〉 N=5; H, K, L, N, R	過去の自分のおこないに、納得できない。	「今考えてみると、金使うことはしたけど、本当の努力はしてなかったなと思う。」(N)	
	〈生きる目的の喪失〉 N=1; E	生活に目的がない。	「この歳になったら、もうあれをしたいとかっていう希望はあまりないですね。」(E)	
第IV段階	Pos.	〈喜び・楽しさ〉 N=7; E, F, G, J, K, L, S	活動自体、あるいは解決のプロセスに喜びや楽しさがある。	「園芸はやっぱり手を入れただけね、愛着を感じるんですよ。だから好きなんです。」(F)
		〈すがすがしさ〉 N=3; H, K, R	その活動をすることで、気持ちがすがすがしくなる。	「歩くと気分がすごくすっきりするの。」(H)
	Neu.	〈上達・成長〉 N=4; G, H, K, L	活動において、上達や成長を目指している。	「こういう活動は、自分の価値を高めたっていうのがあるよね。明日死ぬかもしれないっていうのがあっても、今日いろんな事を学んでおきたいっていう。」(G)

第Ⅳ段階	Neu.	〈意味づけを変える〉 N=5; E, G, K, L, P	活動目標を高いものではなく、納得のいくもの、という様に意味づけし、劣等感を抱かないようにする。	「活動に息詰まることはあったと思うんだけど、いい方に考えるから、あまりそうは思わなくて。だから続けられるんだと思う。」(L)
	Neg.	〈あきらめる〉 N=3; E, K, Q	活動に劣等感を持ち、その活動をやめる。	「パソコンはちょっとやってみただけど、お手上げでした。」(Q)
第Ⅲ段階	Pos.	〈挑戦〉 N=7; D, G, I, J, N, P, S	新しい活動・物事に挑戦する気持ち。	「私の学生時代の学問からは大分発達してるし、そういうものに取り残されないように、新しい話は聞いていきたいと思いますよね。」(G)
	Neu.	〈責任を持つ〉 N=4; C, E, M, T	その活動は自分でないと出来ないという感覚や、責任を持っている。	「今やっている仕事について、かっこよく言えば使命を感じているということですかね。」(T)
		〈社会への恩返し〉 N=3; A, G, P	社会に恩返しする目的を持っている。	「ボランティアは自分が出来ることだったらやろうということで、お世話になりっぱなしだから、恩返しもおこうと思って。」(P)
		〈衰退を意識〉 N=2; I, R	活動ができなくなることを意識しながら、活動を続ける。	「旅行がすごく好きで、これから年取ったらだんだん行けなくなるから、今元気なうちに旅行に行くんです。」(R)
	Neg.	〈現状維持〉 N=5; A, E, K, L, O	活動に目標はなく、現状を維持することで精いっぱいと感じている。	「前は、庭にしても、あれをこうして、今度はここにあれを植えてって考えてたけど、今は現在の生活を守りぬくってことしか考えられない。」(O)
		〈活動に目的なし〉 N=2; D, E	活動に積極的な目的がない。	趣味は「暇をなくしてくれるのが一番いいよね。」(D)
第Ⅱ段階	Pos.	〈内的・外的自律〉 N=13; A, B, E, G, H, I, J, K, L, M, P, Q, R	内的・外的な変化がありながら、それらに負けないように努力・工夫する。	「デパートに行くのも好きだし、バーゲンに行くのも好きだし。そうして自分を励ましてるのよ。自分を元気にするためにしてるの。」(B)
	Neu.	〈体力の衰えを否認〉 N=3; E, K, P	体力の衰えを否認する。	活動をこれから先もやっていける自信は「100%あります。」(P)
		〈範囲の限定〉 N=5; D, E, H, L, P	コントロールする範囲を変えたり、縮小させて、活動を続けようとする。	「目が悪くなって、手芸とかは今はできなくて。でも歩くことは出来るから、毎朝1時間くらいやって。」(H)
	Neg.	〈変化に抗えない〉 N=12; A, D, E, G, J, I, K, L, M, N, O, Q	年をとるといふ変化に勝てないという思いが強い。	「ものを覚えられないっていうのが癪に障るよね。記憶がね。やっぱり年齢には勝てないなって。」(O)
第Ⅰ段階	Pos.	〈神や運命に感謝〉 N=4; F, I, O, T	神や運命といった、絶対的なものに感謝する。	人生がうまくいってるのは「過去の家族が早く亡くなったというのをどこかで埋め合わせしてくれているんだらうと思うんです。神様か誰かが。」(T)
		〈親への感謝, 安心〉 N=4; H, I, K, T	親的人物への感謝の気持ち。	兄弟が多いのに「育て上げてくれたっていうことに対して、親には本当に感謝しています。」(H)
	Neu.	〈後悔を伴う感謝〉 N=4; I, N, O, T	親に対する自分の言動に後悔があるが、その背景には、親への感謝が含まれている。	「お姑さんには何度も『ありがとうございます、すみません』って言ったけど、あれを自分の親に1回でもいいから言えばよかった。」(I)
		〈不信から感謝に〉 N=2; O, T	以前は親に不信感を持っていたが、それが現在は感謝に変わっている。	「私の不幸は親が亡くなったことと、長男が亡くなったこと。だけどそれも後になって振り返ってみたら、それを逆手に取って生きてきたっていう。そういう不幸はあったけれども基本的には愛情に恵まれて前向きに生きてきている。」(T)
		〈一部に信頼〉 N=2; G, M	限定された世界に信頼感を持っている。	「色々行って見て、やっぱり日本が一番いいなって。飛行機から見ると外国の山はみんな灰色なんですよ。日本に帰ってきて初めて緑色の山が見える。」(G)
	Neg.	〈社会に対する不信〉 N=4; B, H, I, R	社会に不信感を持っている。	「今の時代は何かにつけて問題があるでしょう。」(H)
		〈両親に不信〉 N=1; L	両親に不信感を持っている。	「今両親のことを思うと、もうちょっとちゃんと道を作ってくれたらよかったなって思うようなところはあるのよ。」(L)

注. ^{a)} Pos. は肯定的要素, Neu. は中立的要素, Neg. は否定的要素の略である。

る様態（〈人生に後悔〉）が見出されたことから、否定的要素は Erikson et al. (1986/1990) と異なり、統合対否認・後悔であると考えられる。

第Ⅶ段階の特質

第Ⅶ段階は、子どもや孫へのかかわりが一歩引いたものになったり、世話される立場になるといった世話役割の変化が主要なテーマであった。新木 (2005) は、高齢患者と看護実習生のかかわりから、祖父母的世代性の発揮には、高齢者が相手の役に立つ感覚が重要であると指摘している。本研究では新木の指摘する助ける役割の維持（〈世話役割の維持〉など）に加え、育児体験への満足感（〈育児に満足〉など）も関連していることが示唆された。これらより、世話役割の逆転やそれによる現在の世話行動には、過去の育児などの世話行動への満足感が関連しているものと考えられた。また、自身の経験や上の世代から継承したものを次の世代に残そうとする様態や（〈継承を再考〉など）、情緒的な世話の感覚も見出された（〈次世代の幸せ〉）。これらは、自己の死を見据え、自分がこの世に生きた証として最後に行う世話であると考えられ、老年期における第Ⅶ段階の心理社会的課題には、自己の死が強く関連していることが示唆された。

第Ⅶ段階の日米比較 Erikson et al. (1986/1990) は、次世代の世代性の強化のために、世話される役割を引き受けることを第Ⅶ段階のテーマとして指摘した。しかし本研究では、次世代の世代性の強化のために世話される立場を引き受ける様態の他に、子どものことを配慮して世話されないことを選択する様態が見出された（〈世話を遠慮〉）。アメリカでは成人すると子どもは家を出て独立し、以来両親が年老いても同居をする例はごくまれである（秋山, 1992）。一方、日本では家族が老親を介護することが多く、本研究の調査対象者も半数以上がその経験を有していた。すなわち、中年期に親の介護を経験した対象者は、自らの介護経験の大変さを子どもたちに背負わせたくない思いが強いと考えられる。加えて、現在自分が自由に社会活動に参加していることから、子どもたちにも自分と同じような自由な生活をさせたいという思いも背景にあると考えられる。

第Ⅶ段階の心理社会的課題 肯定的要素は Erikson et al. (1986/1990) と同様に、次世代の成長を見て自身の育児に満足し、それによって親役割に区切りがつけられ、若い世代のために祖父母として一歩引いた世話をするのであった。また、祖父母として若い世代とかかわりがなかったり、役割逆転の拒否が否定的要素として認められた。以上より第Ⅶ段階の心理社会的課題は祖父母的世代性対隔たり・逆転の拒否であると考えられる。

第Ⅵ段階の特質

第Ⅵ段階は関係をどのように評価するかがテーマであった。老年期になると親しい家族や同世代の友人が他

界するといった関係の変化が顕著になる。このような関係の変化に対して、本研究の調査対象者は〈変化に折り合う〉〈新しい関係を築く〉など、様々な意味づけをしたり新しい関係を作るといった調整をすることで、親しい関係を持ち続ける努力をしていた。しかし、特に配偶者や親しい友人が他界した場合、亡くなってから長い時間が経ってもなお寂しさを強く感じるというカテゴリもあった（〈寂しさを感じる〉）。近年、喪失した関係を他の関係で補うという階層的補完モデル（田中・兵藤・田中, 2002）に関する研究がされているが、本研究の結果からは、補完できる関係には限界があることが示唆された。つまり、関係の価値によって、調整が可能な関係と調整できない関係があると考えられる。

第Ⅵ段階の日米比較 Erikson et al. (1986/1990) でも、本研究と同様に、関係の変化への対応が第Ⅵ段階のテーマであった。しかし、本研究で得られた〈独立独歩〉というカテゴリが、Erikson et al. では第Ⅵ段階の課題としては取り上げられていない。Erikson et al. では親しい人との関係をいかに愛情を持って語るかが重要な様態として示されており、自立のテーマは第Ⅱ段階や第Ⅲ段階の課題への取り組みで触れている。これらを踏まえると、アメリカでは高齢者にも独立した生活が求められるが、それは関係性という点ではあまり重要視されないと推察される。一方、本研究の対象者は幼少期に戦後という混乱と貧困の時代を迎えたため、青年期には早くから大人としての責任を求められた。すなわち、この生き方が老年期を迎えた現在においても、誰かに依存せずに自分は自分として生きていくこととして現れているものと考えられる。

第Ⅵ段階の心理社会的課題 以上を踏まえると、老年期における第Ⅵ段階の心理社会的課題への取り組みは、関係に意味を付与することでその関係を暖かく感じ続けることと、そのためにその関係が断たれることに調整できず心細さを感じることであった。よって第Ⅵ段階の心理社会的課題は揺るぎない関係対途絶えであると考えられる。

第Ⅴ段階の特質

第Ⅴ段階は、自己感覚と生きる目的をどのように持つかがテーマであった。老年期のアイデンティティ統合のヴィジョンを示した岡本 (1997) によれば、第Ⅴ段階の心理社会的課題は生きることの目的感と自分の役割意識・役割に対する積極的関与であった。本研究でもこれと同様の様態が見出された。さらに本研究では、自己感覚の確認に関連するものとして、中立的要素の〈高齢者のモデル〉〈自分らしさの確認〉が認められ、将来の自己像を具体的に抱いたり、過去の自分の行いや親と自分の共通点などの拠り所を持って自分らしさの確認をしているものと考えられる。これを踏まえると、否定的要素

の〈過去に納得できず〉は、自分らしいものが根拠を持って言えないことがその背景にあると推察される。

第Ⅴ段階の日米比較 本研究では自分らしさを取り戻そうとしたり（〈取り戻す〉〈後悔を再考〉）、自分らしさが見出せない（〈過去に納得できず〉）カテゴリが認められた。これは Erikson et al. (1986/1990) では見られなかった様態である。既述したように、本研究の対象者は職業選択や結婚といった人生における重要な決定を行う時期に、選択の余地のない社会で過ごしたため、本当に求めた自分らしさではなく、そうならざるを得なかった自分を確立していることが示唆される。

第Ⅴ段階の心理社会的課題 以上より第Ⅴ段階の心理社会的課題は確固とした自己 対 自己の揺らぎであると考えられる。

第Ⅳ段階の特質

老年期の第Ⅳ段階は、プロセスに喜びを見出したり、精神や能力が洗練されることに喜びを持つことが特徴であった。成人期までの上向きな成長は、老年期では達成されにくく、劣等感をもちやすくなる。〈上達・成長〉においても、少しずつの成長に喜びを感じたり、〈意味づけを変える〉などのカテゴリが認められたことから、これらの様態は劣等感を抱きにくくし、老年期においても活動を続けるための努力であると推察される。

第Ⅳ段階の日米比較 Erikson et al. (1986/1990) は第Ⅳ段階を自信 対 無能感であると指摘し、本研究でもこれとほぼ同様の結果が認められた。しかし、活動に求めるものの基準の修正は Erikson et al. よりも幅広く行われていた。これは、本研究の対象者が Erikson et al. の対象者よりも積極的に活動を行っていたためと考えられる。また、現在の日本と1980年代のアメリカでは高齢者の社会的地位や高齢者に求められるものが異なることも関連していると推察される。すなわち、日本では高齢者に積極的に活動することを要求しないが、アメリカでは積極的に自立することが求められる。よって、日本の高齢者は活動の選択や、活動への意味づけが、アメリカの高齢者よりも自由に行える可能性がある。

第Ⅳ段階の心理社会的課題 以上より第Ⅳ段階の心理社会的課題は（活動の）喜び 対 劣等感であると考えられた。

第Ⅲ段階の特質

なぜその活動を始めたかという問いに対し、本研究では新しいことに挑戦する気持ちを持ち続けるという様態が示された。また活動に責任を持ったり社会への恩返しという意味が含まれていることも推察された。一方、積極的に目的を持ってない様態も示され（〈活動に目的なし〉など）、活動ができなくなることを意識すること（〈衰退を意識〉）が目的を持ってないことに関連しているものと考えられた。

第Ⅲ段階の日米比較 この段階の否定的要素を Erikson

et al. (1986/1990) は「固執」と指摘したが、本研究ではむしろ活動をあきらめることや、活動の目標を失う様態が認められた。1980年代のアメリカでは依存は死につながるほどの恐怖（秋山, 1992）であったため、自立することが当然のように高齢者に求められ、高齢者自身も強くそれを望んでいたと考えられる。一方、現在の日本では、自立することを促されつつも、それを強く社会から求められることはない。このような違いが第Ⅲ段階のテーマに関連しているものと推察される。しかし、秋山のこの示唆について、高橋（1992）はステレオタイプであると批判しており、本研究でもこの点については慎重に検討する必要がある。

第Ⅲ段階の心理社会的課題 以上より第Ⅲ段階の心理社会的課題は挑戦 対 目的の喪失であると考えられる。

第Ⅱ段階の特質

この段階は身体機能のコントロールに関する語りがほぼ全対象者から得られた。老年期に顕著になる喪失体験として、身体機能の低下、関係性の喪失、社会的地位の変化があげられるが、この中で身体機能の予防は自身がコントロールしやすい部分である。すなわち、幼児前期における自律がコントロール力をつかもうとする様態であるのに対し、老年期における自律はコントロール力が失われて行く中で、限られた範囲でコントロールを維持しようとする様態であると考えられる。

第Ⅱ段階の日米比較 Erikson et al. (1986/1990) の指摘した「社会が高齢者に期待するものにかに折り合うか」についての語りがほとんど得られなかった。これは先述したように、日本とアメリカで高齢者に期待される自立の程度が異なるためと考えられる。

第Ⅱ段階の心理社会的課題 以上より第Ⅱ段階の心理社会的課題は内的・外的自律 対 自律の放棄であると考えられる。

第Ⅰ段階の特質

肯定的要素の〈神や運命に感謝〉〈親への感謝、安心〉は、過去の経験から得た暖かさに対する現在の気持ちであり、守られ感とほぼ同義である。すなわち老年期における第Ⅰ段階の肯定的要素は、基本的信頼よりも受身的な意味を持つと考えられる。高齢者は、長い人生の中で、多くの人とのふれあいを経験している。そのため、老年期を迎えた現在、積極的に周りに働きかけなくとも、暖かなふれあいを懐古し、再体験することができるためと推察される。

第Ⅰ段階の日米比較 Erikson et al. (1986/1990) は、第Ⅰ段階に宗教、特にキリスト教との綿密な関連を見出しており、宗教への確信と、信仰への猜疑心がこの段階の特徴であると示した。しかし本研究では、特定の信仰心を持つ対象者はわずかであり、信仰が直接第Ⅰ段階のカテゴリやテーマに現れることはほとんどなかった。日

I. 乳児期	基本的信頼 対 基本的不信							
II. 幼児前期		自律性 対 恥, 疑惑						
III. 幼児後期			自発性 対 罪悪感					
IV. 学童期				勤勉性 対 劣等感				
V. 青年期					アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散			
VI. 成人前期						親密性 対 孤立		
VII. 中年期							世代性 対 停滞	
VIII. 老年期	感謝 対 不信感	内的・外的自律 対 自律の放棄	挑戦 対 目的の喪失	喜び 対 劣等感	確固とした自己 対 自己の揺らぎ	揺るぎない関係 対 途絶え	祖父母の世代性 対 隔たり・逆転の拒否	統合 対 否認・後悔

Figure 1 老年期における心理社会的課題 (本研究から得られた心理社会的課題を太字で示した。)

本では初詣や墓参りといった宗教行事は広く一般的に行われており、日本人の宗教心は単純に低いわけではないと推察される。しかし日本では宗教という領域が具体的に語られないことが指摘されており(無藤, 1979), 本研究の結果は日本では妥当な結果であると考えられる。

第I段階の心理社会的課題 社会, 世間, 親的人物を暖かいと感じ、それが常にあると感じていることと、周囲を悪意に満ちていると感じ、慎重にならざるを得ないと捉えることの対立が認められた。以上より第I段階の心理社会的課題は感謝 対 不信感であると考えられる。

総合考察

本研究では Erikson et al. (1986/1990) と同様の手続きによる調査を行った。語りの分析から、肯定的要素と否定的要素、およびそれらのバランスをとるための努力である中立的要素の様態を得た。これらの結果より、老年期は、絶えず変化と展開を繰り返していることが推察された。以上を踏まえ、老年期における8つの心理社会的課題を示した (Figure 1)。

なお、各心理社会的課題は明確に切り分けることが困難で、特に第V段階と第VIII段階の心理社会的課題は重なる部分が多かった。これは老年期において、自分らしさを確かめる第V段階の課題への取り組みに、これまでの自分の生き方を認めることが必要不可欠であるためと考

えられる。しかし、そもそも8つの心理社会的課題は、明確に区別されるものではなく、それぞれが悠然一体となっていることを Erikson (1950/1977・1980) は指摘している。老年期の各心理社会的課題の関連をより詳細に検討するために、本研究で行った段階ごとの分析に加え、対象者の語りからの考察が必要であると考えられる。

また、多くの段階において、肯定的要素から成る上位カテゴリの方が、否定的要素から成るものよりも多かった。各心理社会的課題に取り組む土台となる第I段階に、基本的信頼よりも受身的な意味を持つ感謝というテーマが見出されたこと、対象者が社会参加を積極的に行っている人々であったことから、本研究の調査対象者は比較的安定した自己・他者信頼を有していたためと考えられる。加えて、否定的要素を避けることは、数回の調査では調査者との適度な距離をとろうとする試みとして必然的に起こるものでもある。本研究は、一般社会に居住する比較的健康な高齢者の心理社会的課題の取り組み方を示したものである。しかしながら上述のように、本研究の対象者にはある種の偏りがみられ、より多くの人々を対象にし、その対象者の特性を吟味した上で、本研究で得られた8つの心理社会的課題の特徴を検討していくことは今後の重要な課題である。

文 献

- 秋山弘子. (1992). 変容する老人のサポート・ネットワーク. 日本児童研究所 (編), *児童心理学の進歩*: Vol.31 (pp.295-316). 東京: 金子書房.
- 新木真理子. (2005). エリクソンの祖父母的世代継承性と高齢者の看護: 臨床実習の場は「世代間交流の場」でもある. *総合看護*, **3**, 17-23.
- Butler, R.N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65-75.
- Erikson, E.H. (1977・1980). *幼児期と社会 1・2* (仁科弥生, 訳). 東京: みすず書房. (Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W. Norton.)
- Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. (1990). *老年期: 生き生きしたかわりあい* (朝長正徳・朝長梨枝子, 訳). 東京: みすず書房. (Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W.W. Norton.)
- James, J.B., & Zarrett, N. (2006). Ego integrity in the lives of older women. *Journal of Adult Development*, **13**, 61-75.
- McAdams, D.P., Aubin, E. de St., & Logan, R.L. (1993). Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, **8**, 221-230.
- 無藤清子. (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. *教育心理学研究*, **27**, 178-187.
- 中西信男・佐方哲彦. (2001). EPSI: エリクソン心理社会的段階目録検査. 上里一郎 (監), *心理アセスメントハンドブック* (第2版, pp.365-376). 新潟: 西村書店.
- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1240-1252.
- 岡本祐子. (1997). *中年からのアイデンティティ発達の心理学*. 京都: ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子・山本多喜司. (1985). 定年退職期の自我同一性に関する研究. *教育心理学研究*, **33**, 185-194.
- Peck, R.C. (1955). Psychological development in the second half of life. In B.L. Neugarten (Ed.), (1968). *Middle age and aging: A reader in social psychology* (pp.88-92). Chicago: University of Chicago Press.
- Rosenthal, D.A., Gurney, R.M., & Moore, S.M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**, 525-537.
- 高橋恵子. (1992). 比較文化研究から何を学ぶか. 日本児童研究所 (編), *児童心理学の進歩*: Vol.31 (pp. 317-323). 東京: 金子書房.
- 田中共子・兵藤好美・田中宏二. (2002). 在宅介護者のソーシャルサポートネットワークの機能: 家族・友人・近所・専門職に関する検討. *社会心理学研究*, **18**, 39-50.
- 鏑幹八郎. (1986). エリクソンの発達論とライフサイクル. 村井潤一 (編), *発達の理論をきずく* (別冊発達4), 160-213. 京都: ミネルヴァ書房.
- Torges, C.M., Stewart, A.J., & Duncan, L.E. (2008). Achieving ego integrity: Personality development in late midlife. *Journal of Research in Personality*, **42**, 1004-1019.
- Viney, L.L., & Tych, M. (1985). Content analysis scales measuring psychosocial maturity in the elderly. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 311-317.
- Whitbourne, S.K., Zuschlag, M.K., Elliot, L.B., & Waterman, A.S. (1992). Psychosocial development in adulthood: A 22-year sequential study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 260-271.
- 山口智子. (2000). 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み: 回想についての基礎的研究として. *心理臨床学研究*, **18**, 151-161.

付記

調査にご協力いただきました対象者の皆様と関係者の方々に心より感謝致します。

本論文は平成21年に広島大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を再分析したものである。

Fukase, Yuko (Graduate School of Education, Hiroshima University) & Okamoto, Yuko (Graduate School of Education, Hiroshima University). *Psychosocial Tasks of the Elderly: A Reconsideration of the Eighth Stage of Erikson's Epigenetic Scheme*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2010, Vol.21, No.3, 266-277.

This study investigated the eight psychosocial tasks of the epigenetic scheme in a sample of elderly Japanese, and compared the tasks to those outlined by Erikson, Erikson, and Kivnick (1986). Semi-structured interviews were conducted on 20 Japanese (11 males and 9 females, age range=65-86, mean age=74.15, $SD=5.59$) using the same method as in Erikson et al. Qualitative analyses revealed that all psychosocial tasks of the elderly were structured as positive (syntonic), negative (dystonic), and neutral. The following psychosocial tasks were revealed: integrity vs. denial/regret (VIII), grand-generativity vs. distance between generations/denial of influence by younger generation (VII), relationship continuity vs. relationship cessation when in crisis (VI), firm self vs. wavering self (V), pleasure vs. inferiority complex (IV), challenge vs. loss of purpose (III), internal/external ego autonomy vs. renouncement of ego autonomy (II), and appreciation vs. mistrust (I). These findings suggest that although there are variations among elderly individuals, they change the meanings of their various activities and relationships to emphasize maintenance over progression of activities/relationships. In addition, they review their life experiences to create a new self.

[Key Words] Elderly, Psychosocial task, Epigenetic scheme, E.H. Erikson, Ego integrity vs. despair

2010. 3. 8 受稿, 2010. 6. 17 受理

Appendix 1 老年期の心理社会的課題に関する質問項目

第Ⅰ段階に関する質問項目 自分を育ててくれた人とのかわりほどのように心に残っているか。/ これまでの他者・世間とのかわりによって、どのような感覚が得られているか。/ 自分の傾倒する考え方や価値観、宗教など、拠り所となるものがあるとすれば、それは自分にどのような感覚を与えるか。そしてその信仰が揺らぐことはないか。/ 物事や事象・運命といったものをどの程度信頼しているか。/ 自分をどの程度信頼し、あるいは信頼していないか。

第Ⅱ段階に関する質問項目 社会が高齢者に期待するものに、自身はどのように対応していると思うか。/ 自分の思い通りに物事を進められている、選択や決断ができているか。それとも外部やまわりなどに左右され、迷うことが多いと感じるか。

第Ⅲ段階に関する質問項目 目的を持った取り組みや生き方が出来ない時に罪悪感や後悔の念を覚えるか。/ 人生に目的を持っているとすれば、活動や取り組みに、その目的が関連しているか。

第Ⅳ段階に関する質問項目 このような取り組みに制限や限界があると感じるか。行き詰ったときに、どのような感覚になるか。/ 取り組みや活動をうまくやっけそうな感じや自信があるか。/ 仕事・家事やそれに代わるような取り組みは、どのような感覚をもたすか。社会に参加しているという感覚をもたすか。

第Ⅴ段階に関する質問項目 これまでの人生と、今の自分はどのように変化し、そして変化していないか。変化しても自分らしさを感じるものは何か。/ 夢と実際に生きてきた人生に違いはあるか。その違いをどのように感じるか。/ 若いころにやっておくことをやり残したという感じがあるか。

第Ⅵ段階に関する質問項目 配偶者にどのような思いがあるか。/ 結婚生活に変化はあったか。失望することはあったか。/ 友人とのかわりに今、どのような思いがあるか。/ 友人とは、現在どのようなかわり方をしているか。/ 友人との関係は、昔の関係と変わったか。なぜ変わったか。

第Ⅶ段階に関する質問項目 祖父母として孫を世話する時、どのような感覚、思いを持つか。/ 自身の世話や存在が孫たちに影響を与えていると思うか。そのことをどのように感じるか。/ 子どもと自分や配偶者が似ていると思うか。/ 子どもに助言や助力をすることはあるか。/ 子どもから助言や助力されることがあるか。/ 子どもの、大人として・親として成功・失敗をどう考えているか。/ 子育てに関して後悔することはあるか。/ 自分ができなかったことを子どもに託すことはあったか。/ 両親の老いた時、どのような世話をし、それにどのような思いがあるか。/ 世話されることについてどう感じ、世話してくれる者にはどのような思いがあるか。/ 誰か・何かを世話することで得られる感覚は、過去と今とで異なるか。

第Ⅷ段階に関する質問項目 これまでの人生や現在の生き方に後悔はあるか。満足の行くものだったか。/ これまでの生活がそのまま継続すると考えているか。/ 世の中について考えることがあるか。それはどのような考えか。/ 具合が悪くなる、あるいは自分の死について考えることがあるか。/ 経験を重ねることによって、老年哲学(価値観や座右の銘)はあるか。それはどのような時に思い出し、どのように役に立つか。/ 未来の計画を立てることはとても困難だと感じているか。/ 高齢者のモデルはいるか。あるいはこうはなりたくないというものも。

Appendix 2 老年期における心理社会的課題の評定マニュアル (概要)

各段階における心理社会的課題の概要	各要素 ^{a)} とその概要
第Ⅷ段階 過去、現在、死を、人間としての全体感との力動的なバランスの中で認めようとする。	Pos. 過去、現在、死といった人生そのものを受け入れる。 Neg. 過去、現在、死および自分の人生を受け入れられない。
第Ⅵ段階 世話することと、若い世代の世代性を強化し、これに伴って起こるアンビバレンスを克服する。	Pos. 次世代のために世話をする・献身する。 Neg. 次世代とかかわりがない・かかわりを受け入れられない。
第Ⅴ段階 相互性をもってかかわるため、敵意を抑制して献身する。また、衰退による変化に適応する。	Pos. 他者と親密な関係を持つ。 Neg. 親密な関係を築かず、他者と距離を置く。
第Ⅳ段階 希望や夢と、実際に生きた人生を比べ、折り合う。過去と現在の自己感覚を融和させる。	Pos. 過去からの自己感覚を持ち、自分らしさを感じ続ける。 Neg. 過去の自分を否定したり、確信が持てない。
第Ⅲ段階 学びや仕事の取り組みのプロセスで得られる喜び。否定的要素では、この活動が自己卑下と低い自己評価を生む。	Pos. 活動に取り組む過程で、喜びの感覚を得る。 Neg. 活動の困難さゆえに、自分を不適格であると感じたり、劣等感を抱く。
第Ⅱ段階 一つの目的のために同じ行動を追求すること。否定的要素では、正当な理由なしに自分のレベルを落とすこと。	Pos. 目的を持ってその行為に果敢に取り組む。 Neg. 目的をもった行為に行きすぎを感じたり、うまくいかなかった行為にこだわる。
第Ⅰ段階 内的・外的な限界がありながらも、自分にとって意味があり、可能である活動を選択し、行動上の妥当性を維持する。	Pos. 圧力を、納得する形で位置付ける。 Neg. 圧力によって自己の要求に過度にプレキがかかることで、身動きが取れなくなる。
第Ⅰ段階 大切なもの、拠り所となるものを持ちながら、信頼と不確かさに向かうものを融和させる。	Pos. 世間を暖かいと感じ、それが常にあると感じる。 Neg. 周囲は悪意にみち、慎重にならざるを得ないと感じる。

注1. Pos. にも Neg. にも分類されないが、心理的意味を含んでいたり、Pos. と Neg. の両方の意味を含む場合は、Neutral (中立的要素) に分類した。

注2. 各要素の具体例の一部は Table 2 の「語りの例」に示した。

^{a)} Pos. は肯定的要素、Neg. は否定的要素の略である。